

壺阪靈験記

二九

澤市内の段・壺阪寺の段

〔解題〕西國卅三番の札所の第六番なる大和壺阪寺觀世音の靈験記で、德島縣教育會の「義太夫調査書」によれば、明治八年に成り、作者は加古千賀で福地櫻痴の添削となつて居る。千賀女は豊澤團平の妻女であつたが、團平はこれに作曲し、明治廿年二月十日から大阪博勞町稻荷の彦六座で、大隅太夫が團平の三味線で語つて大好評を博し、爾來大隅太夫によつて度々語られていくよ／＼名高くなつた。正本は明治廿四年七月刊行で、校閲初代豊澤團平、著作者加古千賀と奥附にある。これを始めて歌舞伎に移したのは明治廿一年の春で、坂東養助が大隅の淨瑠璃に刺戟された結果で、京都の四條芝居上場が最初であるといふ。

二正り唄夢が。浮世か浮世が夢か。夢てかに。長地カ、リ夫の手助け貸仕事つゞちやの。ホ、ヽヽヽ。オ、お里か。そふ里に。ナオスフシ住みながら。地住めばれさせてふ洗濯や。糊かひものを打盤なたアノおれが三味線彈くを。よい機住むなる世の中に。フシよしあし曳きの。の。フシ音もかすかの暮しなり。唄鳥姫に見ゆるかや。アイナア。ハテナア。大和路や。壺阪の片邊土佐町に。澤市の聲。鐘の音さへ身に沁みて。思ひ出おりやそんな氣ぢや無いわいの。モウといふ座頭あり生れ付いたる正直の。す程。涙が先へ落ちて流るゝ妹脊の川。氣が詰つてく。いつそ死ん琴の稽古や三味線の。糸より細き身代を。詞オ、是は／＼澤市様。今日は何でものけう。エ、。イヤサアノ死んでの。薄き煙の營みに。妻のお里は健やと思うてやら。三味線出して。よい機娘了ふ程。氣が寒いでならぬわいなう。

ニヤコレお里。わしやそなたに。チト言はう。オ、何なりとも言はしやんせ。澤市様。いかに賤しい私ちやとて。現尋ねたい事がある。マア／＼下に居やオ、言はいでか。コリヤお里。マよう。在お前を振捨てゝ。外に男を持つ様な。く。ハテさて下に居やいなう。外の聞けよ。われと夫婦になつて丸三年。そんな女子と思つてか。ソリヤ聞えまことでもないが。いつもは聞かう間か。毎晩七つから先。寂所へ手をやつても。せぬ／＼。エ、聞えませぬわいな。もうと思うて居たが。丁度幸ひ。光陰驚。つひに一度も居た事がない。ソリヤも父様や。母様に別れてから。伯父様のおのごとしとやら。月日の経つはア、早うおれは此様な盲目。殊にえらい痴瘡。世話になり。お前と一緒に育てられ。う一緒になつてからモウ三年。稚いの氣に入らぬは無理ならねど。外に思で。モ見る影もない顔形。どうでわれ三つ違ひの兄さんと。娘いうて暮してウ一様に隠しやるぞつぱりと打明けて。付かぬ痴瘡で。開眼かいの見えぬ其上なぜ。其様に隠しやるぞつぱりと打明けてくれたら此様に。何の腹を立て。なる内に。情なやこなさんは。生れも明けて。言うてたもとどこやら濁る詞うぞい。尤もわれとおれとは從兄弟同殿御の澤市様。たとへ火の中水の底。未のはし。お里は更に合點行かず不審な士。専ら人の噂にも。アノお里は美し。來までも夫婦ぢやと。思ふばかりかコがらに。詞コレ澤市様。そりやお前何いくと。モ聞く度毎におれはもう。レ申し。お前のお目を治さんと。此壺をいはしやんす。嫁入してから三歳のよう諦めて居る程に。格氣は決してせ坂の觀音様へ。明の七つに鐘を聞き。間。モほんに／＼踏程も。隠し立てしぬぞや。コレどうぞ明かして言うてた。タキそつと抜岡で只一人。山路いとはた事はござんせぬが。それともに何ぞもと。娘立派に言へど目にもる。涙す三年越。せつなる願ひに御利生のないかな。ムヽさう言やればこつちもす。縋り付いて。詞エヽソリヤ胸懲なの心も知らずして。外に男がある様に。

今のお前の一言が。私は腹が立つわい。みんなお前の爲ぢやぞえ。サア。それ程に嬉しく女房が。身持さへそこのに。に祈さがすをかけ。願うてたもつた志。有勞はり渡す細杖の。細き心も細からぬ。涙の。色ぞ誠なり。始めて聞きし妻の誠。今更なんと澤市が。詫びの詞もをば。この年月の廻り根性。觀音様ち廻り行く。傳へ聞く壺阪の觀世音は涙聲。司ア、コレ女房ども。何にも言やと言ったとて。罰こそあたれ何のマ人皇五十代。桓武天皇奈良の都にましア。此目が明いてたまるものか。エ、何ます時。御眼病甚しき壺阪の尊像わいなう。モウさうとは知らず。不具のいな。私の體はコレイナアコレ。おへ。時の方丈道喜上人一百七日の御祈の辭に愚痴ばかり。コレ堪へたも前の體も同じ事。そんな愚痴を言はう禱とうにて。忽ち平癒させられ今に至つれとばかりにて。手を合はしたる詫びより。ちやつと心を取直し。觀音様へ西國の。六番の札所とは皆人々の知涙。フシ袖や袂を浸すらん。司ア、コレ共々に。お頼み申して下さんせ。る所。フシげに有難き靈地なり。折添添ふ女房に何の詫び。お前の疑ひ晴ほなづかだと夫を思ふ貞心の。フシ心遣ひぞ哀れられたれば。私や死んでも本望ぢやわいれなり。澤市涙にくれながら。オ、にて。ナホス長増カ、澤市夫婦漸よみがうと御な。イヤモウさう言うてたもる程。過分なぞや女房ども。司さうそなたがわが身の手前目ないわいなう。ガソ一心の。据つた上は御佛の。枯れたる信心は大事なれど。病ひは氣からといれ程にまで信心してたもつても。おれ木にも花が咲くとやら。見えぬ此目はふからは。お前の様にしをと。舊聞が此眼はコレ。マ治りはせぬわいの。枯れたる木。ア、どうぞ花が咲かしたいでばかり居やしやんすと。猶病ひはエ、ソリヤマア何を言はしやんすぞ。いな。と言った所が。罪の深いこの身の重ならう。コレこんな時にはわつさいな。この年月の憂き難。雨の夜。上。せめて未來を。イヤサアノ女房どと。日頃覚えの唄なりと。氣晴らしに歌雪の夜霜の夜も。厭はぬ私が跋參りも。も。手を引いてたもいさく。といふはんしたらどうぢやの。ム、ほんにさ

にせまるも厭ひなく。只の一度も愛想る事もあらん。ふ、幸ひに夜は更けたれば。あなたへうろこなたへ走り。つかさす剥へ。眼かいの見えぬこの身り。人なき中に。オ、さうぢや。堪さ。澤市様いなう。澤市様いなうと地爰をば。大事にかけてたまる志。それとうちやと立上り。亂る心取直し。タキ。かしこ木の間をもる月影に透せば何も知らず色々の疑ひだて。コレ堪忍し。上の段さへ四つ五つはや曉の鐘の聲。か物ありと。立寄り見れば覺えの杖。てたもく。今別れてはいつの世に。舞イザ最期時急がんと。ナキス杖を力にハツト驚き遙かなる。谷を見やれば照又逢ふ事のあるべきか。不便の者やい盲目の林清力、リ探り。探りて漸うとる月の光に分つ夫の死骸。ハアこりやちらしやと。大地にどうと。フシ身を打オタリコなたの。岩にかき上れば。ヨヘリマアどうせう悲しやと。狂氣の如く身伏し前後。不覺に歎きしが。地漸うにいと物凄き谷水の。流れの音もどうを聞え。飛び下りんにも翅なく呼べど顔を上げ。ア、歎くまいく。過三年。と。響くは彌陀の迎ひぞと。杖を叫べど其甲斐も答ふる物は山彦の。シガが間女房が。信心凝らして願うても。傍につき立て。南無阿彌陀佛と諸共カ、リ御。シより外なかりける。開工、何の利益もないものを。いつ迄生きてに。がはと飛込む身の果ては。シカ。リ。こちの人聞えませぬ。聞えませぬくも詮ない此身。世の謡にもいふ通り。哀れなりける。シ次第なり。シカ。リ。わいな。この年月の艱難も。厭はぬ私退けば長者が二人のたとへ。わしが死かる事とも譲知らず。息せき道よりが辛抱はな。只一筋に觀音様へ願込めねのがそなたへ返禮。生き永らへてい女房が取つて返すも氣はそぞろ。常にて。どうぞ早う眼の明きます様。お助づれへなりと。よき縁附きをしてたも馴れにし山道もだり落つやら轉ぶやけなされて下されと。祈らぬ間ともや。ヤ。ヤ。ム。最前聞けば。アノら。漸う登る坂の上。ヨヤア。コリヤ。ないものを。今日に限つて此しだら。坂を登りて右へ行けば。幾何丈とも知コレこちの人が見えぬわいな。澤市様。跡に残つて私やまあ。どうなるぞいなれぬ谷間との事。これ究竟の最期所。澤市様いなう。と地尋ア。どうせうぞいな。どうせうぞいなかゝる靈地の土となれば。未來は助かね廻れど聲だにも。人影さへも見えざく。ア、是を思へば最前に。歌

たに違ひはない。が身内に一つも疵きずつ禮参りは浮木の龜。始めて拜む日の光折しも朝の。日の目を拜んで。お禮申
かす。其上お前のお眼は明く。ホ。コは。年立返る。心地ぞや。是ぞ誠に觀すや神や佛。萬見せ給ふはこれ偏に觀
リヤマア夢ではないかいな。ム、そん音の。二上里御利生ありけるや。見え世音。これ。偏に觀音の。誓ひの重き
なら今。澤市くわいちとおつしやつたが。ぬ眼も見え明らかに。有難かりける新玉の。年立返る如くにて。水も漏らさぬ
コリヤ觀音様が直々に。お呼よび生け下さ玉の。年立返る如くにて。水も漏らさぬの。砂いさごも淨土なるらん御示し有難。か
れましたに違ひはない。堆ハ。ハ。夫婦の命も助かりけるは。誠に目出度りける三重御法なり
ハア有難や忝けなや。是より直ぐにおう候ひける。今日は嬉しや杖を納めて